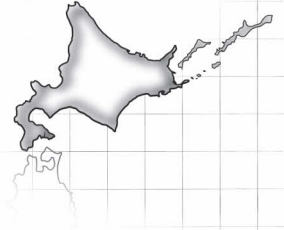


# ペリフェリ ⑭



## スウェーデンの少数民族

日本赤十字社 常任理事 渡邊 芳樹

新型コロナウイルス蔓延当初の2020年スウェーデンでは死亡者が沢山出た。中東アフリカ諸国出身者が多いが出身国別ではフィンランドが最多だった。経験上、有名料理店の給仕はフィンランド人(フィン)が普通。小泉首相が視察した保育所の所長、職員もフィンランド人。

フィンランドは19世紀初めロシアに割譲されるまで約600年もスウェーデンの一部(植民地)だった。19世紀ロシアに割譲され20世紀に入り独立したが、今もスウェーデン語がフィンランド語と共に公用語という深い関係である。

2000年には国内少数民族保護に関する欧州枠組み条約によりスウェーデン国内の少数民族が登録され、2010年に保護と振興が政府の法律上の義務となった。

登録は5民族で総人口の約8%。①フィン約60万人、②トルネダーレン(北部トルネ河西岸の民族)約5万人、③ユダヤ約2.5万人、④ロマ約10万人、



⑤サーミ約3.5万人である。なお、総人口1000万人余の約20%が外国生まれの移民(難民)だ。

外国系人材の活躍も多い。私人大使時代の中央銀行総裁はフィンランド人。エストニア人の財務大臣もいた。医師の3人に1人は外国人と言われる。またポーランド人は土木工事で、中東系移民は介護や生活サービスで活躍する。日本人は学生、研究者、医師、企業駐在員など約4200人。

かつてスウェーデンは優生思想の先進国だった。「人口問題の危機」の著者アルバ・ミュルダールも優良な人的資源の増加

を重視。優生保護法の抜本的強化を実現しナチスドイツに範を示した。また、サーミへの差別は厳しかった。2016年公開の映画「サーミの血」(アマンド・シエーネル監督)が描いた時代は峻烈である。

スウェーデンは2014年にパレスチナを国家承認したが、米国とは歴史的に関係が深い。2013年米大統領来訪の際には自らを「欧州の小さな米国」とも称した。政権は議会第1党社民党ではなく議会第3党保守党が担う。議会第2党スウェーデン民主党(ネオナチから出発した国民政党)が閣外協力。政府は反ユダヤではないが国内的には微妙なところがある。

ユダヤ人は政界や経済界の重鎮も輩出する。後に財務次官やIMF理事を務めた美術界でも著名なユダヤ人とストックホルム県の知的障害者担当幹部のスウェーデン人女性が結婚した。後日、彼女の元同僚が残念がり涙を流した光景は忘れられない。やはり大きな壁がある。